

アスペクトを表す形式(補助動詞)に関する一考察

——中国の大学における日本語教育の観点から——

楊 劍

(青島大学)

目次

1. はじめに
2. 日本語のアスペクトについての定義
3. アスペクトについての発展史
4. 日本語のアスペクトの範疇及び応用
5. 中国語のアスペクトを表す形式「着」「了」「过」など
6. まとめと今後の課題

1. はじめに

日本では、文法学者によって、アスペクトに関する認識も違うので、アスペクトについての説は様々である。アスペクトはまだ発展している段階だと言われているが、現在、中国の大学における日本語教育では、「アスペクト」という言葉はあまり使われていない。講義をする時、教育者はただ間接的に「ている」、「である」などと言われる補助動詞の使い方だけを教えるにとどまり、「アスペクト」の観点から具体的にそれらを説明しなかったように思われる。

よって、本稿では、日本語のアスペクトについての定義から展開して、アスペクトの範疇及び応用をまとめたうえで、「アスペクト」及びそれを表す形式(補助動詞)に重点を置いて、これから中国の大学における日本語文法教育現場で学習者にどのように教えればよいかということを取り巻いて、さらに中国語のアスペクトを表す形式「着^{zhe}」、「了^{liao}」、「过^{guo}」などと比較して、それぞれの特徴を見出して、何らかの関連づけを行いたい。

2. 日本語のアスペクトについての定義

日本の文法学者の中では、アスペクトについていろいろ定義されたが、「広辞苑」では、“アスペクト

とは動詞の意味する動作の様態、性質(例えば:開始、終結、継続、反復)などの差異を示す文法形式。”「…した」と「…していた」の対立が相の差と見られる。これはアスペクトの定義について、最も権威的な解釈であると思う。

「日本語概説」では、アスペクトについて次のように述べる。

話し手が設定した話題の時点において、話題の事柄が始まる段階にあるのか、始まって継続している段階にあるのか、終わった段階にあるのかといった、事柄の動きの段階を表す文法的範疇をアスペクト(動作態)という。これは日本の「学校文法」として、アスペクトについての代表的な説明であろう。さらに、日本で有名な文法学者——金田一春彦は「アスペクトとは、動詞その他用言の意味する動作・作用の進行の相を示す形態の違いである。そして、アスペクトの一つ一つの態は、他の動詞で置き換えることができるような意味を有すると説明した。また他の文法学者の説もあるが、ここでは省略する。

3. アスペクトについての発展史

日本では、文法学者によって、「アスペクト」に関する認識も違うので、「アスペクト」についての説は様々である。日本語の「アスペクト」の研究はまだ発展している段階にあると言われている。本稿を通して、いままで日本では、アスペクトについての研究をどのようにしてきたか、どういう説が出されてきたかを明らかにしよう。

動詞の表す動作の展開の様相^{ようそう}の問題を「アスペクト」と呼ぶ習慣が確立したのは前世紀初頭のことであると言われている。日本の文法学者がこの概念を

日本語に取り入れてから、100年以上経ったそうである。松下大三郎1901年の『日本俗語文典』の萌芽期、金田一春彦1950年の『国語動詞の一分類』、1955年の『日本語動詞のテンスとアスペクト』とそれ以来の成長期を経て、奥田靖雄1978年の『アスペクトの研究をめぐって』から転換期に入ったと言う。

日本の文法学者は「アスペクト」を論ずる場合、松下大三郎1901年の『日本俗語文典』から始めるのが普通である。アスペクトに関する名称として現在も一部使われている現然態（行く）、既然態（行って居る）、将然態（行かうと為る）という用語が初めて現れたのが松下大三郎1901年の『日本俗語文典』である。

松下大三郎はテンスを「用詞（動詞形状詞）」の「偶有的職任（使用上の場合によりてことなる職任）」の一つとして位置付ける。これは「その用詞の表す作用の存在する時の先後を表し」、絶対的なテンス「話説時」（「話説する時」が基準）と相対的なテンス「事情時」（「話説中の一事情が基準）がある。実際の言葉では「話説時」の「現在、過去、未来、不定時」と「事情時」の「現然、既然、将然」とが相結合して分かれる。論理的範疇に形態を対応させる方法である。松下大三郎1924年の『標準日本文法』になって、既然態は「時法」から外されて、独立した。その後、三矢重松1908年の『高等日本文法』、春日政治1918年の『尋常小学校国語読本の語法研究』、小林好日1927年の『国語文法要義』と1941年の『国語学の諸問題』、佐久間鼎1936年の『現代日本語の表現と語法』などの説を経て、金田一春彦1950年の『国語動詞の一分類』、1955年の『日本語動詞のテンスとアスペクト』という説を出発点にアスペクトに関する研究は成長期に入った。金田一春彦1950年の『国語動詞の一分類』では、現代日本語の動詞をアスペクトの観点から、状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、第四種動詞の四種類に分けた^①。1955年の『日本語動詞のテンスとアスペクト』では、現代日本語動詞のテンス・アスペクトに関わる諸形式を、その形式の表すテンス・アスペクト的な意味の観点から整理・分類し、テンス・アスペクトを「状態相のテンス」と「動作相のテンス」、「状態相のアスペクト」と「動作相のアスペクト」に分けた。金田一

春彦の集大成的な研究は次期の研究に大きな影響を与えた。それ以来、他の立場からも数多くの研究が出た。鈴木重幸1957年の『日本語の動詞のすがた（アスペクト）について——スルの形とシテイルの形』と1958年の『日本語の動詞の時（テンス）とすがた（アスペクト）——シタとシテイル』、藤井正1966年の『（動詞＋ている）の意味』、森田良行1968年の『行く・来る』の用法』、高橋太郎1969年の『すがたともくろみ』、吉川武時1976年の『現代日本語動詞のアスペクトの研究』。

鈴木重幸、高橋太郎の研究は、彼らの属する言語学研究会の中では着実に進展してきている。この流れの中で、奥田靖雄1978年の『アスペクトの研究をめぐって』では、彼らの方法論的な誤りを指摘し、アスペクトのとらえ方を示した。日本ではアスペクトについての研究は転換期に入った。

奥田靖雄によれば、アスペクト研究の対象となるのは、スルとシテイルという「文法的形」がお互いに「対立的な関係を結びながら、アスペクトの体系をなしている場合」である。この対立関係をもたず、アスペクトの体系を欠く、いわゆる状態動詞と第四種動詞及び形式だけの対立であって内容は同じ「ニセ・アスペクト」の対をもつ動詞は、対象から外すべきである。こうして、「完成相」（スル）と「継続相」（シテイル）とのアスペクトの体系が示される。さらに奥田靖雄1979年の『意味と機能』では、「カテゴリカルな意味」を設定しなければならない必然性を、アスペクトを例に述べ、「継続動詞」と「結果動詞」を、それぞれ「動作動詞」と「変化動詞」と

① 動詞の分類としては、自動詞と他動詞とに分ける方法、意志動詞と無意志動詞とに分ける方法、独立動詞と補助動詞とに分ける方法、完全動詞と不完全動詞とに分ける方法などが行われている。

現在、中国における日本語動詞の分類は日本の「学校文法」に従って、目的語をとるか否かによって、動詞を自動詞と他動詞に、動詞の活用によって、動詞を五段動詞と非五段動詞（上一段動詞、下一段動詞、サ変動詞、カ変動詞）に分ける方法だけである。しかし、金田一春彦はアスペクトの観点から、すべての動詞を四種類に分けた。即ち、状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、第四種の動詞である。

名付けて一般化した。

以上のように、日本では、「アスペクト」についての研究が様々な立場から数多く出た。どの方法論が正しいか。アスペクト観の変遷の中で、どれが生き残り、受け継がれていくか。この歴史的な評価は現在までまだ下されていない。

4. 日本語のアスペクトの範疇及び応用

日本語ではアスペクトを表す形式には、形態的には、「作りはじめる」「作りきる」のようにいわゆる連用形に直接に付く補助動詞と「作っている」「作りつつある」のようにいわゆる接続助詞「て」あるいは「つつ」の付いた形に付く補助動詞があり、意味的には、動きの始まりや終わりの段階にあることを表すもの（動作相）と、動きの継続的な姿を表すもの（状態相）とがある。なお、いわゆる助動詞の「た」もアスペクトの表現を担う場合があると認められる。

(1) 状態相のアスペクトについて

状態相のアスペクトを表す形式には「ている」「てある」「つつある」「ておく」「ていく」「てくる」「てみる」「続ける」などがある。これらの形式の「て」は古語の完了の助動詞「つ」の連用形から生まれたものであると言われているが、現代語では、「美しくて」のように形容詞にも付くので、接続助詞の一つとされている。＜動作・作用などが現実の段階に入った状態を表す＞というのが、「て」の意義素であると思われる。

(2) 動作相のアスペクト

動作相のアスペクトには、動きの始まりの姿を表すものと、動きの終わりの姿を表すものがある。前者には「かかる」、「かける」、「だす」、「はじめる」があり、後者には「おわる」、「つくす」、「きる」、「てしまう」などがある。

「～かかる」は自動詞のうち動作主体の状態の変化を表すものに付き、

☆ 言葉が喉から出かかっている。

☆ 人が死にかかっている。

のように＜その動きが実現する直前の状態にある＞ことを示す。このようなアスペクトは「将現態」と呼ばれる。

「～かける」は自動詞にも他動詞にも付き、将現態も表すが

☆ 門番が門を開けかけた。のように、＜動作がその始めの段階に入る＞の意の「始動態」をも表し得る。

以下は従来のアスペクトの研究を整理し、特に藤井正 1976 年の『動詞＋ている』、吉川武時 1976 年の『現代日本語動詞のアスペクトの研究』を参考にして、日本語のアスペクトを表す形式——補助動詞「～ている」、「～てある」、「～ていく」、「～てくる」、「～てしまう」、「～ておく」の表す意味をまとめた。

◆ 「～ている」は次のことを表す。

(1) 動作・作用の継続

例：彼は部屋の中で、お母さんに手紙を書いている。

(2) 動作・作用の結果

例：黄河には有名な橋がかかっている。

(3) 単なる状態

例：僕の住んでいる所をかなり広い道路が通っている。

(4) 経験

例：あの人はたくさんの小説を書いている。

(5) 繰り返し

例：彼は毎朝、新聞を読んでいる。

◆「てくる、ていく」は次のことを表す。

1、空間的移動を意味する「している、していく」

※「～てくる」の「～て」は次のことを表す。

(1)「くる」まえにする動作

例：そのかわり、その白い馬はおいていけ。

(2)「いく」方法

例：その時、子供が一人で歩いてきた。

(3)「くる」時の状態

例：コップを持ってきた。

※「～ていく」の「～て」は次のことを表す。

(1)「いく」まえにする動作

例：本屋へ行って、絵本を買った。

(2)「くる」方法

例：みんな、走っていく。

(3)「いく」時の状態

例：わらをくわえていこう。

※「してくる」は次のことを表す。

(4)発言者のいる所へ近寄る動作・作用

例：その声を聞いて、熊は穴から出てきた。

※「していく」は次のことを表す。

(4)発言者のいる所から遠ざかる動作・作用

例：その人は古里へ帰っていった。

2、アスペクトを表す「してくる」と「していく」とは下記のように(3)を除いて、相対応している。

「してくる」は次のことを表す。

(1)出現の過程

例：言葉は生活の中から生まれてきた。

(2)変化の過程

例：だんだんおながが空⁺いてきた。

(3)過程（動作・作用）のはじまり^②

例：そのうちに、雨が降ってきた。

(4)ある時点までの継続

例：お互いに励まし合ってきた、この年月。

「していく」は次のことを表す。

(1)消滅の過程

例：心細く思いながら、消えていく白鳥の群れを見送った。

(2)変化の過程

例：けれども、病気はますます重くなっていった。

(4)ある時点からの継続

例：うまく宣伝して、新しい観光地として、発展させていけばいい。

「してしまう」は次のことを表す。

② (3)「過程（動作・作用）のはじまり」は「してくる」によってしか表されないのである。

(1)、ある過程をもつ動作がおしまいまで行われることを表す。

例：全部の組が言葉を送ってしまうと、組の終わりの人が書いた紙を読み上げた。

(2)、積極的に動作に取り組み、これを片付けることを表す。

例：王様からそれをもらい受けると、自分たちの袋に入れてしまった。

(3)、ある動作・作用が行われた結果の取り返しがつかないという気持ちを表す。

例：目標の灯は、どこかに消えてしまった。

(4)、動作が無意的に行われることを表す。

例：みんな、慌ててしまった。

(5)、不都合なこと、期待に反したことが行われることを表す。

例：車が雪の中にはまって、動かなくなってしまう。

◆「してある」は次のことを表す。

(1)、対象の位置が変化した結果の状態を表す。

例：炉に炭火がいれてある。

(2)、対象が変化した結果の状態を表す。

例：組み合わせてある漢字の意味を手掛かりにすると、熟語の意味が分かる。

(3)、動作が終わったことを表す。

例：私は、あちらの家はもう借りてあることなどを話した。

(4)、放任を表す。

例：机の上には、読みさしの本を開きっぱなしにしてある。

(5)、準備のためにする動作を表す。

例：息子が死なないように、神仏に願いをかけて、その首輪で彼を封じ留めてあるのだ。

◆「しておく」は次のことを表す。

(1)、対象の位置を変化させ、その結果の状態を持続させることを表す。

例：そのほかのものは、本の箱に入れて、並べておく。

(2)、対象を変化させ、その結果の状態を持続させることを表す。

例：このことをぜひ書いておきたい。

(3)、ある時までに対象に変化を与えることを表す。

例：今からよく考えておいてください。

(4)、放任を表す。

例：このままほうっておくにはいかないと、僕は思うのだ。

(5)、準備のためにする動作を表す。

例：その日にしたことで、それを書いておくことによって、将来何かの機会に役立つと思う。

(6)、一時的処置を表す。

例：複雑な文について、その組み立てを調べるのには、まず、連文節を理解しておくことが必要である。

5. 中国語のアスペクトを表す形式「着」「了」「过」など

中国語では常に動詞のあとに付く「着」「了」「过」「起来」「下去」、或いは動詞そのものが重ねて、アスペクトの意味を表す。

「说了」（言った）は「完成態」、「说着」（言っている）は「進行態」、「说过」（言ったことがある）は「経験態」、「说起来」（言い始める）は「開始態」、「说下去」（言い続ける）は「継続態」、「说说」（言ってみる）は「尝试態」という。「了」は日本語の「～た」、「着」は日本語の「～ている、である」、「过」は日本語の慣用句の「～たことがある」、「起来」は日本語の「～てくる、～始める」、「下去」は日本語の「～ていく、続ける」である。動詞そのものが重ねて、日本語の「～てみる」の意味になる。

ここで、注意すべきことは「下去」と「起来」という形式はその前の品詞によって、その表す意味が違うのである。例えば、「走」は動詞であるので、「走下去」は日本語の「行き続ける」の意味になり、「走起来」は日本語の「行き始める」の意味になるわけである。「好」は形容詞なので、「好下去」は日本語の「よくなっていく」の意味になり、「好起来」は日本語の「よくなってくる」になるわけである。次はそれぞれ例文をあげて、分析してみる。

中国語の「着」「了」「过」はアスペクトを表す助詞である。主な作用は動詞のあとに付き、アスペクトを表す。

◆「着」は二つの意味をもっている。その一つは進行態を表し、動作の進行を示す。もう一つは動作の終わった後の結果の状態をも表す。

(1)、「着」は動作の進行を示し、進行態を表す。

☆ 他在大声地说话。

彼は大声で話している。

☆ 现在，小王正在看电视。

今、王さんはテレビを見ている。

☆ 外面正下着大雨，风呼呼地叫个不停，松杨却出发了。

外では大雨が降っていて、風が止まらずにひゅうひゅうと吹いている時、松揚さんは出発した。

☆ 小姬正在教师里给他的母亲写信。

姫さんは教室の中で、お母さんに手紙を書いている。

☆ 小鸟在树上叽叽喳喳地叫。

小鳥は樹の上で囁き囁きしている。

☆ 他一边往家走，一边想着书中主人公的命运。

☆ 彼は家へ歩きながら、本の中の主人公の運命を考えている。

☆ 小李看着书睡着了。

王さんは本を読んでいるうちに、眠れた。

☆ 外面正刮着寒风。

☆ 外では、激しい風が吹きまくっている。

☆ 不知他在想什么？

☆ 彼は何を考えているか知らない。

☆ 他在担心下一步怎么办才好。

☆ 今度、どうすればいいかと彼は心配している。

以上の例では、「着」という助詞があまり現れていない。動詞の動作・作用の継続を表す場合の「着」は、中国語では、よく省略されるが、同じアスペク

トの意味を表す。「着」は動詞の動作・作用を表す場合、いつも「在」と「正在」という“時間を表す副詞”と共に用いられる。“時間を表す副詞”の「在」と「正在」は現在進行態というテンスを示す言葉である。形態的には違っているが、意味的には区別されない。前の例文を言い換えれば、

☆ 他在大声地说着话。

彼は大声で話している。

☆ 他正在大声地说着话。

彼は大声で話している。

☆ 现在，小王在看电视。

現在、王さんはテレビを見ている。

☆ 现在，小王正在看着电视。

現在、王さんはテレビを見ている。

☆ 外面在刮着风。

外では風が吹いている。

☆ 外面正在刮着风。

外では風が吹いている。

☆ 外面在下着雨。

外では雨が降っている。

☆ 外面正在下着雨。

外では雨が降っている。

☆ 小姬在教室里给他的母亲写信。

姫さんは教室の中でお母さんに手紙を書いている。

☆ 小姬正在教室里给他的母亲写信。

姫さんは教室の中でお母さんに手紙を書いている。

☆ 小鸟在树上叽叽喳喳地叫。

小鳥は木の上で囀っている。

☆ 小鸟正在树上叽叽喳喳地叫。

小鳥は木の上で囀っている。

☆ 他一边往家走，一边想着书中主人公的命运。

彼は家へ歩きながら、本の中の主人公の運命を考えている。

☆ 他一边往家走，一边正在想着书中主人公的命运。

彼は家へ歩きながら、本の中の主人公の運命を考えている。

☆ 他在看书。

彼は本を読んでいる。

☆ 他正在看书。

彼は本を読んでいる。

☆ 不知他在想什么？

彼は何を考えているか知らない。

☆ 不知他正在想什么？

彼は何を考えているか知らない。

☆ 他在担心下一步怎么办才好？

今度、どうすればいいかと彼は心配している。

☆ 他正在担心下一步怎么办才好？

今度、どうすればいいかと彼は心配している。

ドアが開いている。

というような中国語の文の中では、「在」と「正在」を置き換えても、日本語の文では、形態的にも意味的にも変わらないということが分かった。

☆ 这里埋着许多死骸。

ここには、たくさんの死骸が埋まっている。

◆「着」は動作の終わった後の結果の状態を表す。

☆ 山上倒着许多树。

☆ 屋里点着灯。

山の上には大木がたくさん倒れている。

部屋の中には電灯がついている。

☆ 月亮还没出来。

☆ 黑板上写着“迎春”一字。

月がまだ出ていない。

黑板の上には、「迎春」という字が書いてある。

☆ 秧苗虽小，却长出许多根子。

☆ 女人抱着要洗的衣服

苗がまだ小さいのに、根がたくさん出ていた。

女は洗濯物を抱えている。

☆ 那是我和弟弟坐着照的像。

☆ 外面正下着大雪，他却只穿着衬衫出去了。

それは僕と弟の座っていた写真です。

外では、大雪が降っているのに、彼はシャツだけを着て出かけた。

☆ 那男子在门口站着。

あの男は戸口に立っている。

☆ 西服放在立柜里。

☆ 那孩子睡着了。

背広は洋服箆笥の中に置いてある。

その子供は眠っている。

☆ 她长着一双美丽的眼睛。

☆ 森林里，光线照不进来，显得静悄悄的。

彼女は美しい目をしている。（特殊な例文、他動詞にもつく。）

森林の中には光を通さず、しんと静まり返っている。

☆ 他的身影消失在雨中。

☆ 白塔耸立在夜空中。

彼の姿は雨の中で消えている。

白塔が夜の空に聳えている。

☆ 他用毛毯裹着全身。

彼は毛布で全身を覆っている。

上の例を通して、動作・作用結果の状態を表す中国語の「着」は日本語の「～ている」の意味を表すと同時に、「～である」の意味も表すことができるということが分かるようになった。これは中国語の一

☆ 门开着。

つの特徴であると言ってもよからう。但し、日本語の「～ている」は自動詞のあとに付き、「～である」は他動詞のあとに付くことが原則であるのに対して、中国語の「着」は動詞の自他に関係なく、どちらにも付くことができる。その原因は日本語の動詞は活用動詞であり、中国語の動詞は活用動詞ではないことであろう。

◆「了」は完了態のAspectを表す助詞である。日本語の「～た」に相当する。「了」は動作・作用が話者によって、既に実現・展開し終えて、もはや続行されない。また、動作・作用の完了の結果の存続している状態を指す場合にも用いられる。例えば：

☆ 他到了东京。

彼は東京に行った。

☆ 工作一结束，小李就回了家。

仕事が終わると、李さんはすぐ家に帰った。

☆ 早上起床后，才知昨晚下了大雪。

今朝、起きてから、昨日の夜は大雪が降ったということが分かった。

☆ 小张上街了。

張さんは町に出掛けた。

☆ 他倒下去死了。

彼は倒れて、死んだ。(動作・作用の完了)

彼は倒れて、死んでいる。(結果の状態)

☆ 昨天，非常失礼了。

昨日は大変失礼しました。

☆ 明白了吗？

分かりましたか。

☆ 昨晚，去哪里了？

昨夜はどこに行ったか。

☆ 下雨了。

雨が降った。

☆ 下雪了。

雪が降った。

☆ 我累了。

私は疲れました。

☆ 他已经回家了。

彼はすでに家に帰った。

☆ 坏啦！我把钱包忘在家里了。

しまった、財布は家に忘れちゃった。

☆ 谢谢了！

有り難うございました。

動詞の動作・作用の完了を表す「了」は以上のほかに、また日本語の補助動詞「てしまう」の意味も示す。

☆ 他死了。

彼は死んでしまった。

☆ 他脱了帽子。

彼は帽子を脱いでしまう。

☆ 国王接过来，放进了自己的口袋里。

王様は貰い受けて、自分の袋に入れてしまいました。

◆「过」は経験態のアスペクトを表す助詞である。日本語の慣用句「～たことがある」と同じ役割を果たすものである。

☆ 我去过西藏。

私はチベットにいったことがある。

☆ 我看过那个电影。

私はその映画を見たことがある。

☆ 他没说过要出差。(否定)

彼は出張すると言ったことはない。

☆ 我吃过好几次寿司。

私は何回も寿司を食べたことがある。

☆ 我没看过那个电视剧。(否定)

私はそのドラマを見たことはない。

「看过」は動作・作用を経験したものとして表すが、「没看过」はその動作・作用を経験していないものとして表す。

◆ 始動の意味を表す「～起来」＝「～始める」。中国語では“开始态”という。

☆ 现在，我开始讲话！

今から、私は挨拶をし始めます。

☆ 开始出发！

出発し始めましょう。

「～起来」はまた日本語の補助動詞「～てくる」の意味も表れる。

☆ 生活富裕起来了。

生活は豊かになってくる。

☆ 成绩好起来了。

成績がよくなってくる。

◆ 継続の意味を表す「～下去」＝「～続ける」。中国語では“继续态”という。

☆ 请讲下去！

言い続けてください。

☆ 走下去。

歩き続ける。

☆ 干下去。

☆ やり続ける。

◆ 「～下去」はまた「～ていく」の意味も表すことができる。

☆ 变得好下去。

よくなっていく。

☆ 一直变大。

ずっと大きくなっていく。

◆ 中国語の動詞そのものが重ねて、試しにする動作を表す。日本語の「～てみる」に等しい。中国語では「尝试态」という。

例： ☆ 请说说看！

言ってみてください。

☆ 试着做做。

やってみる。

☆ 打开看看！

開けてみて。

☆ 吃吃看。

食べてみて。

☆ 他试着举起了手，那边立即作出了回应。

彼が手を挙げてみると、すぐむこうも応じた。

☆ 若不试一试，就不知道。

もしやってみなければ、分からない。

☆ 走近一看，原来是一只猫。

近づいてみると、なんと一匹の猫だ。

☆ 去看看就会明白。

行ってみれば、分かるはずだ。

6. まとめと今後の課題

以上の考察をまとめると、次のような結果が得られた。

日本語では、アスペクトを表す形式には、形態的には、「作りはじめる」「作りきる」のようにいわゆる連用形に直接に付く補助動詞と「作っている」「作りつつある」のようにいわゆる接続助詞「て」あるいは「つつ」の付いた形に付く補助動詞があり、意味的には、動きの始まりや終わりの段階にあることを表すもの（動作相）と、動きの継続的な姿を表すもの（状態相）とがある。なお、いわゆる助動詞の

「た」もアスペクトの表現を担う場合もあると認められる。

中国語の「着」「了」「过」はアスペクトを表す助詞である。主な作用は動詞のあとに付き、アスペクトを表す。動作・作用結果の状態を表す中国語の「着」は日本語の「～ている」の意味を表すと同時に、「～である」の意味も表わすことができるということが分かるようになった。これは中国語の一つの特徴であると言ってもよかろう。但し、日本語の「～ている」は自動詞のあとに付き、「～である」は他動詞のあとに付くことが原則であるのに対して、中国語の「着」は動詞の自他に関係なく、どちらにも付くことができる。その原因は日本語の動詞は活用動詞であり、中国語の動詞は活用動詞ではないことである。

「着」は二つの意味をもっている。その一つは進行態を表し、動作の進行を示す。もう一つは動作の終わった後の結果の状態を表す。動詞の動作・作用の継続を表す場合の「着」は、中国語では、よく省略されるが、同じアスペクトの意味を表す。「着」は動詞の動作・作用を表す場合、いつも「在」と「正在」という“時間を表す副詞”と共に用いられる。“時間を表す副詞”の「在」と「正在」は現在進行態というテンスを示す言葉である。形態的には違っているが、意味的には区別されない。

「了」は動作・作用が話者によって、既の実現・展開し終えて、もはや続行されない。また、動作・作用の完了の結果の存続している状態を指す場合にも用いられる。動詞の動作・作用の完了を表す「了」は以上のほかに、また日本語の補助動詞「てしまう」の意味も示すこともある。

「过」は経験態のアスペクトを表す助詞である。日本語の慣用句「～たことがある」と同じ役割を果たすものである。

中国語の動詞そのものを重ねて、日本語の「～てみる」の意味になる。ここで注意すべきことは、日本語の動詞は活用動詞であり、動詞の語尾変化によって、形態的にも意味的にも構文が変わってくる。しかし、中国語の動詞は活用動詞ではなく、語順によって、構文とされる。

上述したように、本稿では「アスペクト」を重点に置いて述べたが、不備なところも多く、ご批判を仰ぎ、これからの研究を重ねていこうと考えている。それを通して、日本語学習者にとっても、中国語学

習者にとっても多少でも一助になれば、幸いだと思う。

実は、「テンス」は「アスペクト」と深く関わっているので、今後は「テンス」も含めて検討することが課題になる。

参考文献

1. 松下大三郎 『日本俗語文典』(1901、誠文堂)
2. 三矢重松 『高等日本文法』(1908、明治書院)
3. 胡 裕樹 『現代漢語』(1962、上海教育出版社)
4. 金田一春彦 「国語動詞の一分類」(1976、むぎ書房
金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』)
5. 金田一春彦 「日本語動詞のテンスとアスペクト」
(1976、むぎ書房、金田一春彦編『日本語動詞のア
スペクト』)
6. 鈴木重幸 「日本語の動詞のすがた（アスペクト）に
ついて～スルの形と～シテイルの形」(1976、むぎ書
房、金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』)
7. 鈴木重幸 「日本語動詞のとき（テンス）とすがた（ア
スペクト）～シタと～シテイタ」(1976、むぎ書房、
金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』)
8. 高橋太郎 「解説日本語動 5 司のアスペクト研究小史」
(1976、むぎ書房、金田一春彦編『日本語動詞のア
スペクト』)
9. 高橋太郎 「すがたともくろみ」(1976、むぎ書房、金
田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』)
10. 吉川武時 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」
(1976、むぎ書房、金田一春彦編『日本語動詞のア
スペクト』)
11. 藤井 正 「「動詞+ている」の意味」(1976、むぎ書
房、金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』)
12. 奥田靖雄 「アスペクトの研究をめぐって—金田一的
段階—」(1978、むぎ書房、松本泰丈編『日本語研究
の方法』)
13. 小矢野哲夫 「国語学におけるテンス・アスペクト観
の変遷」(1982、12、『日本語学』 1—2号)
14. 仁田義雄 「アスペクトの分析・記述に向けて」
(1984、12、『国語学研究』23号)
15. 森山卓郎 「アスペクトの意味の決まり方について」
(1984、12、『日本語学』 3—12号)
16. 王 力 『中国現代語法上、下』(1985、山東教育出版
社)
17. 杉本 武 「学校文法におけるアスペクト・テンスの
記述について」(1986、3、『都大論究』23号)
18. 高橋太郎 「日本語のアスペクトとテンス」(1987、3、
『学習院大学言語共同研究所紀要』9号)
19. 町田 健 『日本語の時制とアスペクト』(1989、アル
ク)
20. 森田良行 『日本語概説』(1989、桜楓社)
21. 工藤真由美 「過去の出来事の表現—テンス・アスペ
クト体系とその機能—」(1991、3、『横浜国大言語研
究』9号)